

## 3

藪に埋もれ放置されてきた

# 西洋館の現状

竹内農場西洋館は竣工から100年が経過しました。長らく空き家になり放置されていたため、現状は赤レンガの壁面、御影石の土台と一部の部材が残るのみとなっています。敷地が太陽光発電業者の所有となり、一時は解体の危機と思われましたが、市はそれを借り受け、工事をストップさせています。西洋館の今後を考える上で、まず皆様に西洋館の現状を知っていただきたいと思います。

## 林の中に眠っていた西洋館

大正9(1920)年に竹内明太郎の別荘として建てられた赤レンガの西洋館が実際に明太郎の別荘として使われた期間はわずか4年程度です。大正13(1924)年には竹内直馬(明太郎の弟)の住居に変わります。前年の関東大震災で被災し家を失った直馬一家に兄、明太郎が西洋館を貸し与えたと考えられます。

昭和3(1928)年、竹内鉱業の廃業に伴い農場運営が困難となり、直馬一家は農場関係者と共に東京に引き上げます。その後、農場や西洋館の管理は塚本幸三郎氏が竹内家から任されていました。戦後は戦地から復員した黒田清氏(塚本氏と親戚)に管理が変わります。

空き家となった西洋館には泥棒が入り、金目の物はほとんど盗まれてしまいました。そうしたこともあり、戦前戦後を通して管理目的で家の無い家族を無償で住ませたといいます。

最後の居住者(30ページ「最後の居住者真中さんの思い出」をご覧ください)が去ったのは昭和27(1952)年頃で、その後は再び空き家となりました。美しかった西洋館は急速に劣化が進み、屋根が落ち、床は抜け、御影石の土台と赤レンガの壁面を残して廃屋となりました。昭和60(1985)年頃まで屋根があったという証言があり、現在の姿になったのはそれ以降と考えられます。その敷地はまるで西洋館の存在を隠すがごとく藪が覆い、半世紀以上が経過し人々の記憶からも消えていました。昭和52(1977)年から始まった竜ヶ崎ニュータウンの造成が進む中、蛇沼に近い西洋館の周辺は開発から外れ、自然林や畑に囲まれた長閑な区域

となっていました。

## 土地の売却で取り壊しの危機に

ところが、平成26(2014)年、蛇沼に隣接する住宅地と西洋館の間の自然林は伐採され、そこに太陽光パネルが並び、殺伐とした風景に変わりました。こうした状況の中、西洋館の敷地は創設者の竹内家から、太陽光発電会社に名義が変わってしまいました。それを受けて龍ヶ崎市は、急遽保存調査のために太陽光発電会社から土地を借り受けました。一方、建物と敷地は名義が違い、建物の登記は平成30(2018)年まで竹内直馬名義となっていました。幸い龍ヶ崎市は直馬の子孫よりこれを譲り受けることが出来ました。敷地が第三者に渡った情報を独自に得た当NPO法人は、いち早く保存活動を始めました。



写真1 東側から見た西洋館外観。屋根は抜け落ち、度重なる地震などの影響か、レンガ壁の一部には亀裂が入りはじめている。



## 傷みの激しい西洋館

市の調査のため敷地の藪が刈り取られ、西洋館は再び人々の前に姿を現し、俄かに注目を集めています。しかし、その姿はひどく傷み、廃墟化しています。屋根が抜け内部から大きな木が高くそびえていましたが、建物をさらに傷める危険性があり市によって伐採されました。また、玄関を入れてすぐのホール下に地下室がありますが、床が抜けているため大変危険な状態です。西側平屋棟妻側2つの出入口上部のレンガ壁には亀裂が入っていて傷みが激しく、早急な修繕が必要です。



写真2(上) 正面入口。手前に落ちているのはバルコニーの脚とみられる。壁には心ない者による落書き。 3(中左) 西側平屋棟の床下には囲炉裏跡と推定されるレンガの石積み。 4(中中) ホール下の地下室。 5(中右) 壁に残る階段の跡。 6(下左) 北側浴室付近に残る煙突。この付近から「上敷免製」のレンガ刻印が複数見つかった。 7(下右) 西側開口部より二階建て部分を望む。室内には漆喰が塗られていたことが分かる。開口部には木製の上げ下げ窓と金属製のよろい戸が取り付けられていた。